ヒマラヤ学誌　*No.16, 213-223, 2015*

6 ～ 70 歳代で登ったチベット、ネパールの山々 ―失敗例を中心に―

南井英弘

関西学院大学山岳会

60 年前の 1955 年、山岳部の新人だった。暁の星を見ながら米を洗い、薪をくべ煙にむせびながら食事当番をしていた。そんな時、戦前の英国ヒマラヤ遠征隊の報告書を読んで驚いた。

「Good morning, Sahib, Hot tea, Sir」と言ってキッチン・ボーイがテントを開け、熱い紅茶を持ってくる。暫らくすると「Sahib, Hot water, Sir」と言ってテントの前に洗面器に並々と注がれたお湯が置かれ、これで顔を洗う。何と優雅な山行だ、こんな山登りもあるのだ。会社勤めを終えたら何としてでもヒマラヤで登山を楽しもうと決意した[1]（参考資料 1）。

2009 年 4 月・2010 年 6 月・2014 年 4 月開催の雲南懇話会で、海外の山旅で体験した自分の大きな失敗例を中心に体験を紹介する機会があった。本稿では、懇話会で話した失敗例及びその他の事柄を紹介する。なお、それぞれの懇話会毎に主題と関係付けて編集してあるので、記述は時系列的になっていない。ご了承をお願いしたい。

1. 6～70歳代で登ったチベット、ネパールの山々（第28回雲南懇話会で講演、2014年4月19日開催）

（1）2004 年 9 ～ 10 月、シシャパンマ中央峰[2]（チベット）登山、登頂

2002 年にムスターグ・アタ（7546 m）を無酸素で登り、特に息切れもなく登頂できた経験から八千メートル峰も夢ではないと意欲が湧いた。

この 7 年間連続してカラコルム、ヒンズークシュ、崑崙に、関西学院大山岳会や日本山岳会（以下「JAC」という）の仲間たちと共に、リーダーとして出かけていた。2003 年のバルトロ氷河からゴンドコロ峠を越える際に隊員の一名は高度の影響で瀕死の重体に陥り、隊長の責任を痛感させられた。この反省から、次回から単独か或いは一隊員として気軽にヒマラヤ登山を満喫したいと考えるようになった。

2004 年の対象をシシャパンマに決めるまでは、通いなれているカラコルムの一峰、昨年もその鋭鋒を目前に見たガッシャーブルム 2 峰（8035 m）を第一候補とした。しかし登山許可書の一人分をシェアーしてくれる隊が見つからなかった。

また、丁度 30 年前にゴーキョから見た、印象深い白雪に覆われたチョー・オユーも第二候補としたが、秋の公募登山隊は見つからなかった。

この様なことから、JAC の理事仲間である大蔵喜福氏が隊長を務めるアドベンチャーガイズ社主催のシシャパンマ中央峰（8008 m）商業公募登山隊に参加を申し込んだ。

結果的には初見の巨峰を登頂し、かつ未知のチベットの山々を見ることができ、大きな収穫となった。

岳友が主宰するとはいえ、公募登山隊に参加したのは、この時が初めてである。全てに於いて楽だった。

（2）2013 年秋、メラ・ピーク（ネパール）登山、登頂…（参考資料 2）―指示の不徹底により、夜中を含めて連続 22 時間の行動を余儀なくされた例―

2013 年 9 月 23 日に出発し、10 月 24 日、BKK 経由で帰国した。

10 年ほど前から登れそうなピークで景観も楽しめると気にしていたが、ルクラ飛行場からキャラバン 2 日目で 4610 m の Zatrwa La（峠）を越えることが可能か思案し躊躇していた。近年、国内外でメラ・ピークの公募広告を見かけるので現地に照会したところ、峠の手前、4000 m 辺りにバッ

ティーが開業しているとの情報を得た。それで意を強くして単独で出かけることにした。

この秋、ネパール・ヒマラヤ東部は 1952 年来という悪天候が続き、入山以来 12 日間毎日、雨または雪。歩き出して 12 日目、Khare Camp（カレー・キャンプ 5045 m）から Mera La Base Camp（5350 m）に入った時も雪だった。幸いその夜半から快晴になり、10 月 8 日 Mera High Camp（5780 m）を設営。

翌日、10 月 9 日未明（2:30）にアタックに出発。メラ氷河の広大な雪原状の緩斜面を登る。

夜が明ける頃には東の空高くカンチェンジュンガ山群が浮かび上がり、背後にはチョー・オユー、ギャチュンカン、プモリ、ヌプツエ、エベレスト、ローツエ、マカルーといった巨峰が屏風のように突っ立ち、バルンツエ、チャムラン、カンテガ、アマダブラム、クスムカンカル、キャシャールなど凄い鋭鋒群も目前に聳えている。凄い景観だ！

連日の降雪で新雪の深い所は腰、弱い風が吹いていたので平均して膝上くらいまでのラッセルあり。

ハイ・キャンプを出発したのは一番だが、追いついてきた外国隊の連中と前後しながら登った。最終的に頂上目前に迫った時にはヨーロッパからの数隊はいつの間にか下山の途につき、またもや私達（ガイド 2 人と小生）が最先端に立っていた。

頂上直下へのクレバス帯を越す為に手探りでルート・ファインディング中、どこからか大きな男が現れ同じクレバス帯の安全ルートを探し始めたが、我々が先行し頂上直下へのルートを開いた。（11:20）

早速、頂上直下から垂直に近い蒼氷の氷壁にフィックス･ロープを取り付けて、10 月 9 日正午、吾がガイドと共に足跡一つない汚れなき 2013 年ポスト・モンスーン初の Mera Peak（6654 m）の頂上に立った。

我々が頂上へのルート工作をしているのを 100 m ばかり下まで登って来て眺めていたカナダ隊の 2 人、そしてクレバス突破の最中にどこともなく現れた大男もフィック・ロープの下まで来て「フィックス・ロープを使用して登頂させてほしい」と言う。大歓迎して、5 人でお互いの登頂を祝福し合った。

登頂時に俄かに強風と濃いガスが湧き上がり、山頂や尾根の風下に雪煙が舞い始めていた。

楽しみにしていた頂上からの展望は全くきかず、残念の極みだった。

広大な雪原状の斜面の為、下山時にガスや地吹雪になった場合は GPS にトレースできた往路を頼りに下山する覚悟でいたが、濃霧は頂上を含む山頂付近のみに限られた。下山中の視界は日が暮れるまで何とか効き、トレースも残っていた。ハイ･キャンプ（5780 m）まで戻ったのが 16:00 丁度。

足腰もかなり疲れているし空腹を感じていた。ハイ・キャンプでザックに残った食糧を食べ、仮眠を取って翌早朝にメラ・ラの前進キャンプを飛ばして Khare Camp（カレー・キャンプ）に帰るよう考えた。が、ポーターが気を利かせてキャンプ道具一式を既に Khare Camp まで運び下ろしたとのこと。

夕暮れの氷河上の下降は、雪原をフラフラになりながら何とか歩いたが、日が暮れてから、大小岩石の間を縫ってルージュのコースの様に凍りついたツルツルの急斜面を下る頃から、足腰の力が無くなってきた。スリップすれば大怪我間違いなし。慎重に慎重を重ねて全神経を集中し一歩一歩踏み出していた。その内、遠くから二つの灯りが近付いてきた。私の帰りが余りに遅いのでポーターが迎えに来てくれたのだ。

殆ど休みなく歩き続けた。手頃な岩があったので「1 分もたれて休む」（岩などに一度腰を下ろすと 2 度と立てないと考えていた）と言ったら、ポーター曰く「この窓は南井さんの部屋ですよ！」と。夜中 24:20 だった。嬉しいことに Khare Camp の小屋の横まで下ってきていたのだ！テントを張らずに小屋の 1 室を借りてくれていたのだ。温かい紅茶を少しずつ飲んで陽が昇るまで昏睡！

夜中を含めて連続 22 時間の行動で、体力と精神力を使い果たした。

高齢者は 15 時間程度迄の歩行が限度、やはりハイ・キャンプで泊まるべきだった！私がしっかり指示をしなかったので、彼らは私が予定時間通り快調に登り登頂したことを知り、善意でハイ・キャンプを撤収してくれたのだ。翌日は幸い好天、終日眠りこけた。

翌 10 月 11 日から下山の途に、空身でゆっくり下るだけの脚力と体力は回復していたが、次の小屋までが限界。その上、またもや夕方から雪と雨

が降り始めた。

往時、ルクラから Zatrwa La 峠（4610 m）越えは高所順応も順調で、急な草付きの斜面と連続する石段の山道も体力を温存していたのでルンルン気分だった。しかし復路は連日の雨か降雪。高所では全てがデブリで埋まり、凸凹の雪道に変わっていた。特に往時でも 1 時間を要した Zatrwa La 峠の稜線は 2 m 程の積雪があり、デブリが 4 ～ 5 m に盛り上がっているところなど無限に続くように思われたが、何とか明るい内に、往時 2 泊した Kharka Teng（4080 m）のバッティーに転がり込んだ。

そしてやっとの思いで、翌 17 日薄暮迫るルクラ空港にヨタヨタの態で生還した。

16 日午後から携帯電話が通じる山域に入った。18 日振りに登山関係の情報が入り始めた。大雪で雪崩が頻発し、沢山の登山隊に犠牲者が出たり、ヘリの救出が続いていると聞いた。

確かに 17 日、上空は厚い雲に覆われ、早朝から谷の雲間をヘリコプターが頻繁に行き来していた。

（参考）

メラ・ピークの標高：◎ Nepal Mountaineering Association（NMA）発行の登山許可書 "Climbing Permit" では Height:6654 m となっている。また、"Mountaineering in Nepal Facts and Figures"（Government of Nepal, Ministry of Tourism & Civil Aviation, 即ちネパール政府登山局 09 年 6 月発行の 164 ページにも Mera Peak = 6654 m と記してある。カトマンズで NMA から得た Mera Peak の登山許可書（Height 6654 m）を提出して、Khare Camp で登山手続きもした。

しかし、一般市販地図などでは Mera Peak の最高峰は北峰 6476 m となっている。最後のフィックス・ロープを使って登攀する登り口に GPS をデポして登頂したので正確な数値はないが、標高差は 20 m 前後だろう。北峰直下のデポ地点で GPS は 6487 m と記録している。6654 m とは大きな差がある。

近年、多くの公募隊を含む登山者が登っているのは一般市販地図にあるメラ・ピーク北峰であり、Khare Camp で登山許可書をチェックしている主人も北峰が NMA 許可のピークだと言った。

帰国後、「ヒマラヤ名峰事典（平凡社）122 ページの地図」にメラ・ラの北側稜線伝いに「△ピーク 41」6654 m と記された登山許可書の 6654 m と同じ標高の山があることに気付いた。気がかりである。

2. ヒマラヤ通いの自己体験（第11回雲南懇話会にて講演、2009年4月18日開催）―2008年チュルー最東峰登頂と2006年マナスルでの教訓など―

(1) チュルー最東峰で得たこと…山麓から高みへ

「チュルー登山で得たこと」としては、今までにヒマラヤ登山で経験しなかった低地から氷河の世界に至る「ヒマラヤ植生の垂直のトレッキング」があります。

即ち、マルシャンデー川の下流、舗装道路がなくなった亜熱帯のベシ・シャハル（760 m）からトレッキングで連続 8 日間の歩き、降雪と氷河地帯に達した。そして 6 日後には氷雪の上を登って 6,038 m の頂上に達した。5,000 m 以上の標高差を登った。

パパイヤやババナ、タロイモが実り、蒸し暑く緑滴る稲田の地から、歩き始めた。道中は懐かしの蛙、小魚、ヒルにもお目にかかり、初日の夜はホタルの乱舞に見惚れた。4 日目には熱さも薄らぎ葉物の野菜が豊富になり、リンゴや高原野菜の世界に入った。そして、赤色の畑ではソバが収穫の時を迎え、黄金色の大麦と共に刈り入れに忙しい時期だった。やがて針葉樹林帯を抜ければ、ほんの少しの低木と枯れた高山植物の世界があり、後は不毛の地、残雪地帯へとつながり、地表は氷河や積雪の下になっていた。

学生時代から憧れていた「アンナプルナ」を目前に、モーリス・エルゾーグ著、近藤等訳「処女峰アンナプルナ」の一字一句を思い浮かべながら暫し感激に佇ずんでいた。とに角、目の前に大きな屏風のようにどっかりと構えるアンナプルナの姿には、圧倒されっぱなしだった。

シャシャパンマ、チョー・オユー登山では飛行機でラサの高地に降り立ち、またマナスルでは 2 度とも BC までヘリコプターで入ったので、ヒマラヤの麓を知ることがなかった。素晴らしい体験だった。

ビザの取得は、至極簡単。カトマンズ到着時に

1 ヶ月、3 ヶ月など、入国管理所で数分で取得できる。この数年、日本でビザを取得したことはありません。

(2) 2006 年マナスル登山での大失態…筋硬直（筋痙攣）の発作

05 年春のマナスルから帰国後 1 年 3 ヶ月、ボッカ、耐寒訓練、富士山登山、常圧低酸素室での特訓、そしてオリンピック選手のアドバイザーを努める東京大学大学院大谷勝教授のご指導（味の素社、アミノバイタル PRO の摂取）を受け、筋肉強化に努めた。70 歳を越えているのに驚いたことに下腿・上腿は勿論、腕や胸、腹までしっかりした筋肉がついた。

この様な絶好のコンディションでマナスルの山麓に降り立った。9 月 11 日、曇り空の下、サマ村から BC に向う。途中で雨となり、雨具を着て大汗をかきながら（生来、大汗かきです）7 時間かけて BC 到着。夕食前にはすごい空腹感があった。いざ夕食を食べ始めたところ、何故か唾が出てこなく、いくら噛んでも食事が腹に流れ込まない。胃も受けつけない。

実は 2001 年、カラコルムのスパンティークに出かけた時は強烈な下痢をした。帰国後 JAC の某ドクターに話したところ、ウイルスか、暑さや危険などのストレスによる胃潰瘍だろうとの見解をいただき、次回から胃潰瘍の薬を携行するように薦められた。マナスルの BC 入り後、息苦しさも無く、SpO_2 値や放尿量も夜間 2 リッター強を含め仲間と同じような数値を示し、嘔吐、下痢、熱感覚も無かったので高所の影響ではないと判断していた。

2 週間分の胃潰瘍の薬も払底したので何とか対策を採らねばならない。遠征には常時携帯している「登山の医学ハンドブック」（杏林書院刊、日本登山医学研究会編）を藁をも掴む気持ちで読み返した。電解質の喪失が食欲不振の原因らしいことにやっと気付いた。

ポカリスエットを口にし、食欲も徐々に回復して、アタックに出発する 9 月 28 日の朝には何とか皆と同じ量の食事を腹に流し込む事が出来るまでになった。BC を出て数時間後、ナイケ・コルに近づいた時に左大腿部全体が万力で締め付けられるような衝動を感じた。まだまだ沢山のクレバスやスノーブリッジを渡らねばならない。この異様な衝動の度に歩行を中断して、ゆっくりと貧乏ゆすりをしながら、この万力で締め付けられるような痛さが消えるまで立ち止まった。意識はしっかりしており、クレバスを飛び越えたり、クレバスを大股で跨ぐと、大腿部全体どころか左半身全体がガチーンと固まってしまう様な気がした。このような衝動が C1 入りするまで 10 回ほど起こった。C1 のテントに入った直後、左足を伸ばそうとした瞬間に今にも左半身全体が固まりそうな衝動が数分続いた。やがてこの衝動も自然に消滅した。このような体調に鑑み、翌日はアタック隊を見送り、暖かくなるのを待って下山の途についた。BC に帰着して、再び「登山の医学ハンドブック」を読み返したところ、この締めつけるような衝動は「筋硬直」と呼ばれるものであることが分かった。やはり、電解質の不足、特に Na 不足が原因であることを知った[3]。

帰国後、野口いづみ先生にこの症状を話したところ、血液検査をしていないので確定はできないが、「低ナトリウム血症」の症状の可能性が高いとのことだった。食欲不振と筋痙攣は低ナトリウム血症の代表的な症状である。電解質のバランス異常として、低ナトリウム血症は比較的起こりやすい。筋硬直の発作（痙攣）は「いきなり起こる制御できない激しい筋肉の収縮」とされている。ポカリスエットや塩分を取らずに大量に水ばかり飲んだ結果、水分摂取過剰となり希釈性低ナトリウム血症になったようだ。我がヒマラヤ登山史上最高の舞台で、入山時の体調が良かったために油断が生じ、迂闊にも初歩的な取り返しのつかない失態を演じた。あと一歩無理をしておれば、もっとひどい筋硬直を起こしてマナスル氷河の底か、マナスル山頂より高い所に放立ったことだろうと戦慄を覚えた。

遠因の一つとして高齢である自分は高血圧症でもないが、平素から出来るだけ塩分摂取を控える生活をしていた。そして今回同行したコックは美味しく、非常に薄味の食事を提供してくれ、感謝していた。サマ村入り後、BC 入りするまでにも減塩生活をしていたと言っても過言ではなかった。

足腰の筋肉がついたことで何か油断があった。スポーツ・ドリンクは、飲んだ後に口内に残る甘

さなどに抵抗があり、国内の登山でもあまり口にしなかった。粉末は沢山持参していたが、全く飲んでいなかった。私は灼熱のアラブ諸国で6年生活したけれど、幸いこのような経験はなかった。ただし、サウジで長年生活した友人に話したところ、「ゴルフ中に全身が固まってしまった仲間がいた。救急車で病院に運び込まれ数時間の点滴で無事退院した」と。心臓は動いていたが全身硬直し、言葉も出なかったようだ。

(3) 2003年夏、バルトロ氷河、ゴンドコロ峠越え…同行者の高所障害と徘徊

2003年夏、7月18日～8月15日、バルトロ氷河の遡行をした時の失敗談である。

1) 日程概要（詳細は、参考資料3）

7月20日､チラス泊。21日､スカルド(2,300 m)。途中略。
8月1日、コンコルディア（4,450 m）
2日、 3時間ほど散策
3日、 本隊（同行仲間）の5人は､往路を下山。峠越え希望者3人はヴァイン氷河を遡行し､アリ･キャンプ経由ムニール(5,000 m弱）に設営。
4日、 夜中の1時半出発、吹雪のゴンドコロ峠（5,700 m、朝7時35分着）を越え、ヒュースパン（4485 m､14時着）で設営。
5日、 ヒュースパン（休養日)。6日､サイチョ(3,300 m)。7日、フーシェ着。ジープでカプルーに。

2) 高山病の発症

1. 本人は初めてのヒマラヤ入りだがコンコルディア（4,450 m、8月1日着）まで問題は無かった。
2. 8月3日、ムニール・キャンプに近づいた頃から歩行速度が遅くなり、キャンプ入りした時は顕著に衰退がでた。食欲はなし。深呼吸すら辛そう。SpO_2 値は何度計測しても50前後であった。シュラフに篭もって起座姿勢で深呼吸を継続させるも、気合を入れないと止めてしまう。同僚と交代で、本人を寝かせず起座の姿勢で深呼吸を続けさせた。
3. 吹雪の中、1時半にテントから出発、数分もしないうちに自力では歩くどころか立つことも出来なくなった。大型のポーターに背中に担いでもらうことにした。
4. 言葉も出ない。やがて担いでもらいながら失禁したようだ。ズボンの尻部から滲み出てきた。
5. フィックス･ロープを設置してくれているが、氷河上部は大きなクレバスが沢山口を開けている。やっとの思いで猛吹雪の峠に7時半に到着。ポーターが背負っているが、微かな呼吸はして何とか生きている。独り立ちをさせようとするが、その力なし。
6. ポーターは峠に張ってあったフィックス・ロープ設置者（前の年からフーシェ村の若者達がゴンドコロ峠越えの登山隊から使用料を取って商売を始めた)のテントからシュラフを一つ借用してきた。背負っている男の遺体を入れて　蹴り落とす準備をしていると言う。(引き摺り下ろすような生易しい斜面では無かった。)
7. 吹雪でカチカチに凍りついたフィックス・ロープに安全を託し、数百mほど下った。
8. フィックス・ロープの最低部まで下った地点で、本人がやっと目を開けた。
9. 糞をしたいとのこと、大分体調は良くなったようだ。
10. 途中から背負うのをやめ、ゆっくりではあるが自力でヒュースパンまで歩かせた。(8月4日)

3) 徘徊

その夜、サブ・リーダーの大きな声に飛び起きた。テント近くに仲間がいない…と。私もテントから抜け出した。100 mほど下流の氷河上辺りにライトの灯が見えた。こちらの灯火に気が付いたのか数分かけて戻ってきた。氷河上に流れる流水の中を渡渉したらしく膝から下はずぶ濡れだった。よくぞクレバスに飲み込まれなかったと、無事生還を喜んだ。

翌日、本人は疲れてはいるが高度を下げた方が良いか、休養させたほうが良いか迷った末、二人で監視しながら休養日とした。翌々日に下山したが異常は無かった。

4）お多福さま（浮腫）≪ 2003 年夏≫

バルトロ氷河遡行の 6 日目の朝、パイユ到着（3,285 m、7 月 27 日）の翌朝、女子隊員の顔が、外から見ると目が開いているのか閉じているのか判断できない程、まん丸に腫れていた。

ダイアモックスを 1 錠服用させたところ夕方には正常に戻った。十分の利尿でお多福は回復し、その後コンコルディアまでこのような現象は出なかった。トレッキング開始時から、ダイアモックスを毎日半錠服用するように指示していたが、無視していたようだ。水分摂取量も少なかったようだ。

(4) 2000 年夏、ヒンズークシ、ディル・ゴル・ゾム（6,778 m）に登頂ー下山後の鼻血

2000 年夏、ヒンズークシ、ティルチミール山塊のディル・ゴル・ゾム（6,778 m）に登頂後、TBC[註1] であるチトラールに帰着。翌朝、シャワーの最中に鼻血が出た。色はどす黒く粘度の高いものだった。しばらく止血をせずに流した。

ガイドが心配してチトラールの病院で診察を手配してくれた。大きな病院を訪ね、指示された受付に行った。案内に従い入室したのが手術室。手術用のベッドが数台有り、3 人が夫々手術を受けていた。医者の指示に従ってベッドに寝そべり、診察かと思いきや何か医療行為を始めた。15 分ほどして OK との事。確かめてみれば、鼻血が出ないように電気メスで治療しておいたと有り難いお言葉だった。…無料だった。

(5) その他

- スカルドでも病院にお世話になった。酷い下痢の後、体力回復のため点滴を受けた。…無料。
- 2002 年 7 月、中国新疆ウイグル自治区の高峰・ムスターグ・アタ登頂時（登頂日は 7 月 26 日）に受けた凍傷処置の為、下山後カシュガルの町外れにある陸軍系の第 12 部隊病院でお世話になった。一般の人民病院では凍傷は診察しない。医師から「打つなどして傷をつくり細菌を体内に入れないよう」忠告があり、アルコール系の入った液体薬を毎日数回、塗布するよう指示を受けた。塗布薬を含め無料。

3. ネパールの山旅、2009年（第15回雲南懇話会にて講演、2010年6月19日開催）―ひっそりと佇む河口慧海記念館―

(1) マルファ村の河口慧海記念館

09 年秋、ロー・ムスタンにあるタシ・カン峰（6,386 m）登頂の際、TBH[註2] にしたマルファ村（カリガンダキ河上流、ジョムソムの 5 km 程南、アンナプルナとダウラギリの中間）の「河口慧海記念館」を訪ねた。

「記念館」には、河口慧海師の集めた膨大な数の一切経・経典、仏像、仏画、仏具、マニ車、数珠、当時の生活用具、民具、旅道具、衣類等など保管・展示されている。

1999 年、マルファ村の人たちが、

"In 1899, The Japanese Zen Monk adventurer and Pioneer Himalayan Traveller, KAWAGUCHI EKAI stayed with the headman of Marpha, ADAM NARYAN SUBBA, for three months before continuing his BUDDIST Pilgrimage to Lhasa. The People of Marpha feel honoured to have known this great man and would like to offer him our highest respects on the one-hundredth anniversary of his stay in this Himalayan Village."

という事でこの記念館を建設し、維持管理している。是非、多くの方々に訪問していただきたいと思う。

河口慧海師は「仏教の原点たる真実の教えを解明したいとの望みから、サンスクリット（梵語）原典や漢訳よりも正確と言われるチベット語訳を入手し、読破するためチベット入りを志した。当時、多くのヨーロッパ人達も隠密裏にラサ入りを企てていたが、河口慧海師は長い年月をかけネパール語やチベット語、民族・習慣を研究し、間道を抜けてチベット入りした後も回り道をしながら、虎視眈々とチベット入りを狙っていたヨーロッパ人やロシア人などに先立ち、外国勢として

註 1：TBC とは transportation base camp のこと。キャラバンで担ぎ上げた BC でなく、トラックやジープなどで荷上げができる BC のことを指す。

註 2：TBH とは transportation base house のこと。車で荷物を運びこんだテント代わりのロッジや小屋のことで、この時は小さな旅人用の宿だった。

初めてラサ入りに成功した。凄い快挙です。彼は仏典を求めてラサ入りしましたが、大方の外人勢は情報活動でした。

記念館を訪問したのは登山後でもあり、写真記録は甚だ不充分なものとなりました。河口慧海については、河口慧海著『西蔵旅行記』（博文館）、河口慧海著、金子民雄監修『西蔵旅行記　抄』（中公文庫）、河口慧海著、奥山直司編『河口慧海日記　ヒマラヤ・チベットの旅』（講談社学術文庫）、奥山直司著『評伝　河口慧海』（中公文庫）など等、ご覧ください。

(2) パンディットの活躍 [4]

2009 年に英国で発行された Richard Sale 著 "MAPPING THE HIMALAYAS ―Michael Ward and the Pandit Legacy"[5] なる書物を日本山岳会の図書室で手にした。

同書によれば、南下を狙うロシアとのグレート・ゲームが激しくなり、英国インド測量局はアフガニスタン、ネパール、チベット、ブータンなど地図の空白部分を埋めるため、自分達が変装してこれらの未開地に入ろうとしていたが、犠牲者が出るなど自力では不可能と悟った。その代わりインド人をパンディットとして教育し、これらの僻地に送り込み、地図作成に当たらせた。

この書物には、パンディット達がどのように変装して未開の地域に入りこみ、どのようにして地図作成に必要な情報を入手し、貴重なデータを持ち帰ったか、具体的に記されており、実に興味深い。パンディットの大半は仏教徒だったが、ムスリム（イスラム教徒）やヒンズー教徒もいた。"MAPPING THE HIMALAYAS"では、パンディットたちへの教育を下のように記している。

パンディット達への教育内容

初期はパンディット各々の歩幅を測っておき、歩いた歩数から距離を割り出したが、後に彼らの足首に紐を括って平坦地、登り道，下り道のどこでも、1 マイルを 2,000 歩（一歩が 80 cm）で歩くように特訓した。仏教徒のパンディットは巡礼者に変装し、数珠球を 108 個から 100 個に減らして「オムー・マニ・ペメ・フムー」と繰り返し唱え歩きながら、100 歩で一つ数珠球を動かした。数珠球が 1 回転すると 10,000 歩（5 マイル）を歩いたことになる。

巡礼者はマニ車を手に持って回しながら歩いており、マニ車の中には経文が書かれた巻紙が入っている。パンディットたちは、この巻紙に毎日の行動を記録した。

方位計はコンパスと共にマニ車の中に隠し、傾斜計と一体化したコンパスで道などの傾斜角度を計った。温度計は杖の中に隠した。気圧の変化で水の沸点は変化するが、おおよその高度は計測できた。通常、巡礼者は運搬箱も持ち歩く。そこでパンディットたちは運搬箱を 2 重底にして、六分儀を隠し緯度を測った。また水平盤を得る為に水銀も持参していた。この水銀は貝殻内にワックスでシールして、水筒の中に隠した。経度測定器を用いた人もいたが、起伏の多い長旅の運搬時に壊れやすく、経度は歩数資料から読まれることが多かった。更に、位置の決定に星座の知識も教えられていた。

また、ムスリムのパンディット達は商人に変装してカラコルムやアフガニスタンなど主にイスラム地域で活動した。

彼らの地図が如何に正確であったか。後にパンディットがチベット北部と東部 4,500 km を 4 年半かけて踏査し作成した地図の誤差は 1％以内であると評価された。

参考資料

1. 1997 年以降の海外山歴

1997 年夏、ブルダール・ピーク（5602 m）、パキスタン、ナンガパルバット山塊…自力登頂を目指すも撤退。

1998 年夏、スコロ・ラの東峰（5670 m）、カラコルム…蒼氷の氷壁に登高断念。

1999 年夏、ゴンドコロ・ピーク（5650 m）、カラコルム、フーシェ谷源流…登頂

2000 年夏、ディル・ゴル・ゾム（6778 m）、パキスタン、ティリチミール山塊…登頂

2001 年夏、スパンティーク（7027 m）、カラコルム…仲間は登頂断念、自身は BC から撤退。

2002 年夏、ムスターグ・アタ（7546 m）、中国・新疆ウイグル自治区…登頂

2003 年夏、バルトロ氷河、ゴンドコロ峠越え、カラコルム…仲間が重度の高度障害

2004 年秋、シシャパンマ中央峰（8008 m）、中国・



写真 1　シシャパンマ BC（5700 m）（2004 年 9 月 19 日）



写真 2　メラピーク山頂と頂上直下の氷壁、登頂を果たして（2013 年 10 月 9 日）



写真 3　チュルー最東峰、登頂を終えて（2008 年 9 月 28 日）



写真 4　マナスル、サマ村にヘリで到着（2006 年 9 月 8 日）



写真 5　コンコルディアキャンプ（4450 m）から望む K2（2003 年 8 月 2 日）



写真 6　マルファ村、河口慧海記念館正門（2009 年 9 月 29 日）



写真 7　記念館の玄関に架かった表札（2009 年 9 月 29 日）



写真 8　館内の展示室、経典・仏画など（2009 年 9 月 29 日）

チベット自治区…登頂
2005 年春、マナスル（8163 m）、ネパール、ブリガンダキ・サマ村…悪天候のため撤退
2006 年秋、マナスル（8163 m）、マナスル登山での大失態…隊長を含む 3 名は登頂、自身は C1 から撤退。
2007 年秋、チョー・オユー（8201 m）、中国・チベット自治区…5 人が登頂、自身は C2 手前で撤退。
2008 年秋、チュルー最東峰（6038 m）、ネパール、マルシャンディ…登頂
2009 年秋、タシ・カン（6386 m）、ネパール、ドルポ…登頂
2010 年秋、タルプ・チュリ（5663 m）、ネパール、アンナプルナ内院…頂上目前で撤退。
2010 年 11 月、ダージリン、シンガリラ尾根からカンチェンジュンガ展望
2011 年秋、パルドール（5928 m）、ガネッシュ・ヒマール…ガイドの意向を押し切り、撤退。
（参考）2012 年 3 月 3 ～ 11 日、ドロミテ、同行 4 名
2013 年秋、メラ・ピーク（6654 m ？）、ネパール、クーンブ…登頂、22 時間の行動を余儀なくされる。

2. 2013 年秋、メラ・ピーク（ネパール）登山、登頂の日程

9 月 23 日、成田空港発、バンコク空港内のホテルで 1 泊
24 日、バンコクからカトマンズ（1300 m）入り
25 日、休養と準備
26 日、早朝、カトマンズ発（15 人乗り小型機）、ルクラ（2840 m）着、直ちにキャラバン開始、Chutanga（3020 m）へ、小屋泊まり。4 時間、途中から雨。
27 日、高所順応のため Kharka Teng（4010 m）往復、往復 4 時間、帰着後大雨。
28 日、Kharka Teng 入り、バッティー（茶店）にて宿泊。3 時間、大雨。
29 日、高所順応のため Zatrwa La 方面に 1 時間半ほど登る。小雨と雪。
30 日、Zatrwa La 峠（4610 m）を越えて Thuli Kharka（4010 m）入り、小屋泊まり。5 時間弱、ガスと小雨。
10 月 1 日、Thuli Kharka から Kote（4180 m）入り、小屋泊まり。8 時間、ガスと雨。
2 日、Kote から Tangna（4350 m）入り、小屋泊まり。7 時間、雨。
3 日、高所順応のため 1 時間ほど登るも雨が酷くなり小屋に戻った。
4 日、Tangna から Khare Camp（5045 m）→実質の BC. 3 時間半、雨、小雪。
ここから上はテント生活の予定が、連日の雨でテント・サイトは泥田のように水が浮き、テントは不可。
5 日、休養と高所順応、小雪と小雨。
6 日、天気待ちの休養日とした。（5 日夕方、やや天気回復の兆し、初めて夕方の空の一角が薄っすらと見えた）
7 日、Khare Camp から Mera La BC（5350 m）入り。4 時間半、霙と雪。メラ・ラの峠は強風が吹きぬけるので少し下った所がキャンプ・サイトながら霙と降雪で岩盤の上は水浸し。幸いガイドたちも初めて見たと驚いたブルー・シートの小屋掛けのバッティー（ガイドたちは Five Star Hotel と名付けていた）があったので泊めてもらった。夜中に何度も小便に小屋掛けから外に出たが、夜半頃から雪空が天の川も輝く快晴に変った。
8 日、Mera La BC から大雪原状のメラ氷河を遡り High Camp（5780 m）入り、大きな岩峰の下にテントを張った。4 時間弱。テントは大小全部で 20 張りほど見かけた。
9 日、午前 1 時に起床。しっかりと食事を摂り、どこの隊よりも早く 2 時 30 分に出発した。平均して膝くらいの深さのラッセルで殆ど休憩も取らずにゆっくりと登り 11 時 20 分に山頂の手前まで達した。ヒドン・クレバスを渡り、山頂基部からフィックス・ロープをセットして 12 時丁度に吾がガイドたちと 2013 年ポスト・モンスーン期　初のメラ・ピーク山頂に立った。
悪いことに登頂時には山頂付近にガス

が俄かに湧き上げり、楽しみにしていた展望は全くきかなかった。幸い濃霧は頂上付近だけで広大な下山時のルートは視界が効いた。16 時に High Camp 到着、Mera La BC もすっ飛ばし Khare Camp に精根使い果たして帰還したのが 24 時 20 分過ぎ。22 時間弱、快晴。

10 日、Khare Camp、テントなど乾燥日干しする横で昼寝と休養。

11 日、Khare Camp から Tangna まで何とか歩いたが 4 時間を要し、泊まる。夕方から雨がしょぼついた。

12 日、Tangna から Kote まで 6 時間半、午後から雨。

13 日、Kote から Tatok（3580 m）まで滝のような大雨の中、7 時間半。酷い登り降りのキツイ路。

14 日、Tatok で大雨待機、停滞。

15 日、Tatok から Thuli　Kharka へ、雨と雪の中、6 時間半。急な登りオンリーの路。

16 日、Thuli Kharka か ら Kharka Teng ま で Zatrwa La（4610 m）を越えて下山。6 時間半、雪。

17 日、Kharka Teng から Lukla 飛行場まで帰着。7 時間、曇天。

18 日、Lukla から朝一番・7 時発の 15 人乗り小型機で振り出しの Kathmandu 帰着、曇天。

3. 2003 年夏、バルトロ氷河、ゴンドコロ峠越え…同行者の高所障害と徘徊

7 月 20 日、チラス泊、

21 日、スカルド（2,300 m）

22 日、デオサイ高原（4,000 m）、高所順応ハイキング。

23 日、トンガル（3,000 m 弱）…アスコーレより 2 時間手前

24 日、アスコーレ経由コラホン（3,005 m）

25 日、ジョラ（3,120 m）

26 日、バルディマル（3,165 m）

27 日、パイユ（3,285 m）

28 日、パイユ（休養日）

29 日、ホブツエ（3,700 m）

30 日、ウルドカス（3,930 m）

31 日、ゴロ 2（4,165 m）

8 月 1 日、コンコルディア（4,450 m）

2 日、 3 時間ほど散策

3 日、 本隊（同行仲間）の 5 人は、往路を下山。峠越え希望者 3 人はヴァイン氷河を遡行し、アリ・キャンプ経由ムニール（5,000 m 弱）に設営。

4 日、 夜中の 1 時半出発、吹雪のゴンドコロ峠（5,700 m、朝 7 時 35 分着）を越え、ヒュースパン（4,485 m、14 時着）で設営。

5 日、 ヒュースパン（休養日）

6 日、 サイチョ（3,300 m）でキャンプ、

7 日、 フーシェ着。ジープでカプルーに

参考文献

1） 日本山岳会「山岳」（2014 年、Vol.109）

2） 関西学院大学山岳会ホームページ；http://www.kg-ac.com/oversea_ensei/0409.html

3） 日本登山医学研究会編「登山の医学ハンドブック」（杏林書院、P99 ～ 103）

4） Richard Sale「MAPPING THE HIMALAYAS ― Michael Ward and the Pandit Legacy」（Carreg Limited. UK、2009 年）

5） 日本山岳会「山岳」（2010 年、Vol.105, P258 ～ 262）

Summary

Mountains in Tibet and Nepal which I Climbed in My Sixties and Seventies
— Centering on Examples of My Failures and Lessons —

Hidehiro Minamii

Kwansei Gakuin University Alpine Club

I had three opportunities at The Yunnan Forum to present my own experiences of mountain-climbing in the Himalayas, centering on examples of failures and lessons learned from them.

1. April 19, 2014

Shisha Pangma Central Peak and Mera Peak: mountains in Tibet and Nepal which I climbed in my sixties and seventies:

2. April 18, 2009

My experiences going to and from Chulu Far East Peak. Huge mistakes committed while climbing Manaslu; experiences of nose bleed, everyday diarrhea, drip-feed and frostbite; and also witnessing altitude sickness, roaming at midnight and face swelling.

3. June 19, 2010

My deep impression of the serene aspect of Kawaguchi Ekai (a Japanese monk) Memorial Museum and energetic activity of Pandit.

4. Reference materials: My personal history of mountain-climbing in the Himalayas after the year 1997 onward.